

脊髄損傷者における介助犬の 理学療法的応評価及び効果に関する検討

村井敦士

横山記念病院リハビリテーション科

{研究目的}

今回「脊髄損傷者における介助犬の理学療法的適応評価及び効果に関する検討」の課題の中で効果については、実動件数が少ないことと実動期間が短いことから、予測と可能性を述べることにする。適応評価については訪問調査により、使用者及び使用希望者の能力評価とそのニーズの確認と検討を述べることにする。また今後、理学療法士がどのように介助犬に関わっていけば良いかを考察する。

{研究方法}

訪問調査により、使用者及び使用希望者の能力評価とそのニーズの確認と検討を行う。

{研究結果}

使用希望者1症例と使用者1症例を紹介し検討する。

使用希望者：S氏（43歳・男性）

診断名：脊髄損傷（Zancolli:C6B2）

障害名：四肢麻痺、直腸・膀胱障害

受傷日：昭和50年3月

能力評価：

筋力：Deltoid5/5,Biceps5/5,Triceps0/0,Wrist ext.3/2,flx.0/0,Fin-ger0/0

知覚：C7以下鈍麻、C8以下脱失

生活状況：食事はフォークを、2・3指にはさみ自立。更衣は時間がかかるが自立。整容は工夫して自立。排尿は集尿器にて自立。排便は下剤を飲んで、週1回。

自宅は、車椅子対応家屋でエレベーター設置済み。

介助犬へのニーズ：落ちたものを拾う。

使用者：M・I氏（37歳・男性）

診断名：頸髄損傷（Zancolli:C6A）

障害名：四肢麻痺、直腸・膀胱障害

受傷日：平成4年1月

能力評価：

筋力：Deltoid5/5, Biceps5/5,Triceps0/0,Wrist ext3/2, flx0/0,Finger 0/0

知覚：C7 以下鈍麻、C8 以下脱失

クローヌス：陽性

ROM：右手指軽度屈曲拘縮

生活状況：

基本動作は、全介助。エアーマット使用のため夜間の体位変換はない。車椅子の駆動は屋内は可能であるが、屋外は、電動車椅子を使用している。食事は装具使用にて自立。更衣は介助。整容は軽介助。排尿は膀胱ろうで、排便は週2回浣腸と摘便を行う。入浴はシャワーチェアで介助。

現在24時間のヘルパーを導入している。

環境制御装置が設置され、段差をなくす等の住宅改造済みである。

介助犬へのニーズ：

- ・夜間の下肢の体交、寝返り
- ・車椅子坐位時の体幹の引き起こし
- ・座位時の足の位置換え

現在の状況：

訪問調査を施行した時期は、介助犬（ワカ）と暮らし始めて5週間ほど経過したところであった。

I氏は、「ワカとの信頼関係がやっとできあがったところ」とのこと。

まだ、上記のI氏の介助犬へのニーズの動作までは行えていなかった。現在行える動作は、・車椅子の左にstay, bringする。・リビングのドアの開閉。・ベランダの戸の開閉。・照明のon/off。・エレベーターのスイッチ押し。・人を呼びに行くなどである。

{考察}

2症例を通して、介助犬へのニーズを確認すると大きく5つのニーズに分けられる。今回はその5つのニーズについて考察する。

①物を拾う、取ってくる。…物を拾う、取るという動作は健常者が思っているほど楽な動作ではなく、実際、S氏は者を拾うという動作に対して不便を感じ、かつ人に頼みづらいと言っている。この動作については、介助犬の適応と考えるが、今後、者の堅さ、物の重さなどの検討が必要と思われる。

②ドア、窓の開閉。…ドアの開閉については物などを運ぶ際に必要で、手指の麻痺が強い頸髄損傷者にとっては大変な動作になる。換気などの窓の開閉についても、健常者なら簡単でも環境制御装置などを設置しない限り、やはり大変な動作になる。この動作についても、介助犬の適応と考えるが、今後、ドアの種類、ノブの形やカギなどの検討が必要と思われる。

③起居動作の介助。…頸髄損傷者にとって寝返り、起き上がり、トランスファーは褥瘡予防などのため、大切な動作である。この動作については環境制御装置などの置き換えが難しく、介助犬の適応と思われる。今後、理学療法としても最も関われる動作と考える。

寝返り、起き上がり、トランスファーを介助させる際に、使用者と犬に負担にならないような支持をする位置や補装具を検討していかなければならない。

④車椅子駆動の介助。…屋外の移動については段差などの障害物が多く、それによって行動範囲がせまくなっているのが現状である。その範囲を少しでも広げるために、介助犬は適応と考える。今後、引き上げる角度や方法、補装具の検討が必要と思われる。

④介助者などの人を呼ぶ。…転倒などの緊急時に、人を呼んだり、コールなどに介助者が気がつかなかった場合に適応になるとと思われる。

効果については、前回の報告と同様で、今後の訪問調査の経過をみてから報告する。しかしながら、I 氏の場合、ニーズとしての動作はまだだが、精神的なところでは効果はあったと思われる。

{結論}

今後の理学療法士の課題としては、まず、上記のニーズの検討である。①物を拾う、取ってくる。②ドア、窓の開閉については作業療法士が中心と思われる。③起居動作の介助、④車椅子駆動の介助については特に、理学療法士として関わられると思われる。③については、アメリカの症例では使用者が肘や腰などを逆に痛める例も報告されているので、理学療法士として、このようなことを考慮しながら方法や補装具を考えなければならない。④についても、引き上げる方法、角度によっては転倒などの危険性があるので、このようなことを考慮しながら検討していく必要がある。

最後に、今後最も考えなければならないのが、理学療法士への啓蒙活動である。理学療法士に介助犬を、杖や車椅子と言った補装具と同様の一つの選択肢として考えられるようにしていき、介助犬の希望者を増やしていく必要がある。

全体的な評価

		寝返り
・意識レベル	基本動作	<起き上がり
・残存機能<		立ち上がり
・住環境	ADL	<移動面< PT
・生活サイクル		<生活面< OT
・犬との相性	など	

脊髄損傷者における介助犬の 作業療法的適応評価及び効果に関する検討

引き起こし動作介助の可能性

加藤清子

山田病院作業療法科

A. 研究目的

介助犬による介助動作のチェックポイントを明かにする。介助犬の有用性を検討する。

B. 研究方法

介助犬と生活し始めた I 氏を訪問調査し、現在行っている介助犬による ADL 動作を確認すると共に、I 氏の介助犬に対する need であり、工夫中の車椅子座位時の引き起こし介助を取り上げ検討する。

C. 研究結果

M. I 氏 身体機能状況

診断名：頸髄損傷（Zancolli:C6A）

障害名：四肢麻痺、直腸・膀胱障害

筋力：Delt5/5、Bicep5/5、Tricep0/0DT2/2、Wrist df3/2、

pf0/0、Finger ext0/0、flex0/0、

下肢 Illo 以下 0/0

知覚：C 7 以下鈍麻、C 8 以下脱失

反射：Biceps ↑ / ↑ ,Brach ↓ / ↓ ,Triceps N/ ↓ 下肢 亢進、足関節クロームス陽性

ROM：右手指軽度屈曲拘縮

1. 生活状況

基本動作は、全介助。エアーマット使用の為夜間の体交はない。車椅子の駆動は、屋内は可能であるが、屋外は、電動車椅子を使用している。食事は装具使用にて自立。更衣は介助。整容は軽介助である。排尿は、膀胱ろうによる。排便は週2回浣腸と摘便を行う。入浴は、シャワーチェアにて介助である。

現在、24 時間のヘルパーを導入している。自宅は、都心のマンションの5階であり環境制御装置が設置され、段差をなくす等の住宅改造済みである。介助犬に対する need は車椅子座位時の体幹の引き起こしである。

2. 現在の状況

訪問調査時介助犬と暮らし始めて5週間経ったところであった。I 氏は、介助犬ワカとの信頼関係がやっとできたところと話していた。介助犬への need であった動作を行うと

ころまでいっておらず、車椅子の左に stay する、bring する等基礎的なことを確実にしている段階であった。現在ワカにより行っている動作は、リビングの入り口ドアの開閉、ペランダの戸の開閉、照明の on・off、エレベーターのスイッチ押しである。

3. 引き起こし動作介助について

I 氏は、車椅子座位時、座位バランス不良のために前に倒れやすく、自力では起き上がれない。車椅子座位時の上体の引き起こし介助は、I 氏の介助犬に対する need である。介助者が行う場合は、車椅子の横または後ろに立ち I 氏の上体を両手で支え引き起こす。介助犬の介助にて引き起こす場合、以下の check point がある。

【補装具について】

介助犬の場合は力を加えるのが一点であり、口でくわえて引っ張るので、補装具が必要となる。この補装具は、レシピエントの感覚脱失した部分に装着するものであるため、力が一点に集中しない程度の幅があり丈夫でソフトなものが好ましい。また犬が口で引っ張るロープをつけるが、引きやすいようにくわえる部分を太くして目印をつける。

【力を加える位置について】

介助犬が物を引っ張るとき、床に足を踏ん張り口でくわえて引く。その力を利用すると、力点の高さを変えるのは困難である。上体が倒れてしまったレシピエントの車椅子の後ろに介助犬が周り補装具の先をくわえて引くと車椅子のバックレストの位置が支点となり、犬の引く力がレシピエントの上体を引き起こす方向より胸部、頸部を前方より圧迫する方向に強く働いてしまう。そこで、支点を高く設けると犬の引く力を上体を起こす方向に強く働かせることができる。しかしレシピエントは、バックレストに腕をかけて座位時の除圧を行っているため、その妨げにならないように設定する必要があり、現在考案中である。

【指示の出し方】

- ①まず介助犬を車椅子の後ろに回らせる
- ②"pull" とロープを引っ張らせる
- ③上体が起きたところで"give" とロープを離させる

このように引き起こしの動作を遂行するまでに3段階の指示を出す必要がある。

また、レシピエントと介助犬は見合うことができないので"give" と指示されたら介助犬は確実にロープを離さないとレシピエントの胸部、頸部に負担がかかり危険を伴う可能性もある。

D. 考察

訪問調査時点で行えている動作は、I 氏の身体を直接動かす動作ではなく環境の調整と言う意味があると思われる。また、比較的パターンの定まった動作である。指示の出し方は、介助犬とアイコンタクトをして"open door"等と言う。レシピエントは介助犬が行っている動作を直接見て確認できる。しかし、引き起こし介助を介助犬が行う場合は、更に検討を加える必要があると思われる。車椅子の後ろに位置した犬の口が力点になるので、レシピエントに補装具を装着してもらった上で、引く力の方向をコントロールする必要が

ある。介助動作は日常的に繰り返すので、頸部、胸部の圧迫や、転倒などの危険を避けた方法を考案していくのに加え、レシピエントの感覚脱失している部分に補装具を用いることによる皮膚障害も考えられるので、毎日その部分の皮膚チェックをする等のセルフケアも必要と思われる。

また、介助者のように様子を見て力の加減はできないので、介助犬への 3 段階の指示を出すタイミングを自分で確実に計りコントロールする必要がある。このようなレシピエントと介助犬の高度な協調動作を行う前段階として、基本的な、お互いに信頼し得る関係を築くことが必要である。介助犬がレシピエントとの生活が始まった初期の頃から、ある程度実用性のあるドアの開閉、照明の on,off などの介助を繰り返し行うことにより、レシピエントと介助犬の信頼関係を築いていくことができるであろう。そして、レシピエントは介助犬の主人としての意識を持ち、お互い自信をつけといけることにつながっていくと思われる。

介助犬を利用した生活において、レシピエントが介助犬へ指示を出すタイミングを計り介助動作をコントロールしていくと言う点が、日常生活において介助者に頼るのではなく自分で動作をコントロールしているという達成感、更には生活への満足感につながるものと思われる。

また二次的に期待できる効果として付け加えるならば、介助犬に日常的に指示を出すことで、(大きな声ではっきりと発声するので)呼吸機能の維持、向上が期待できると思われる。そして、介助犬との遊びを通して、上肢の運動機能、座位バランスの向上も期待できると思われる。

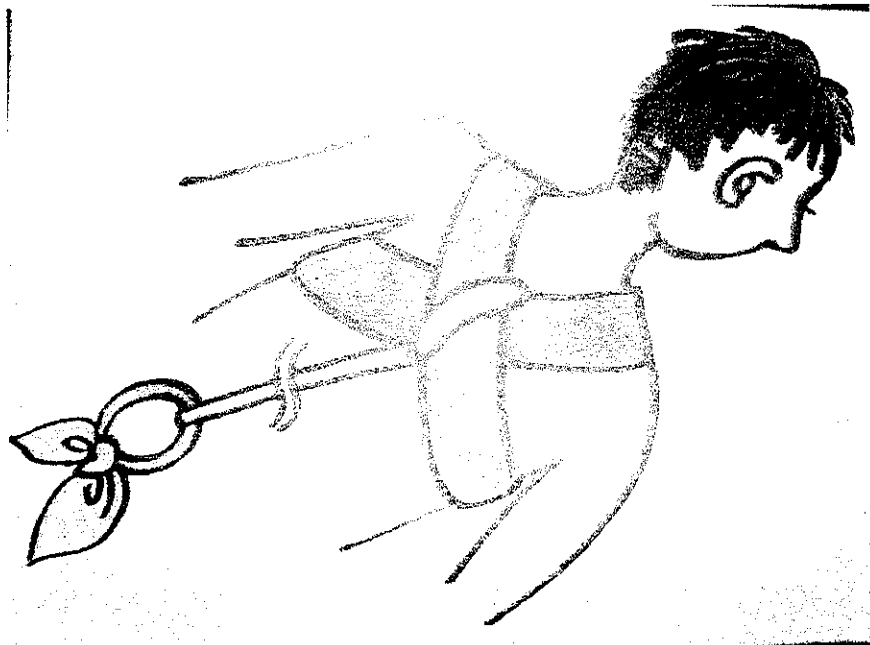
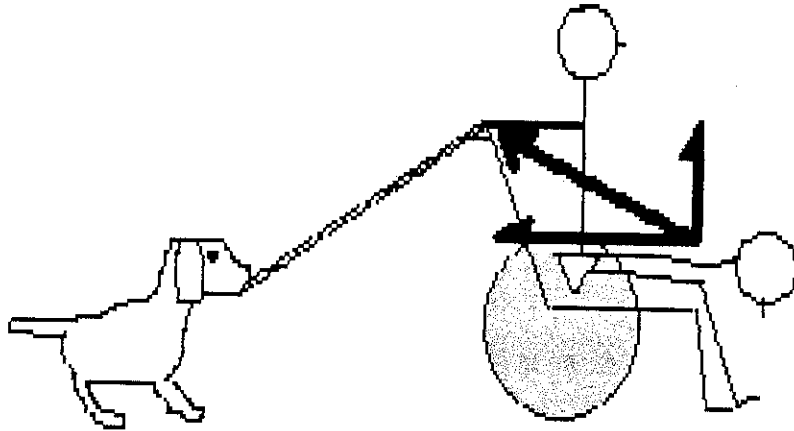
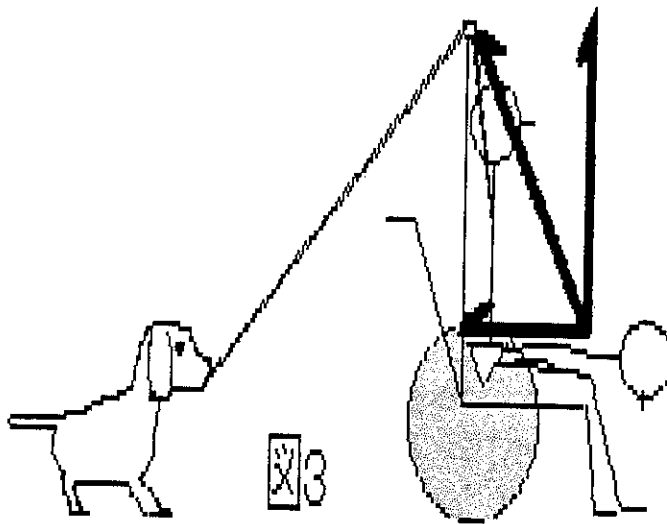


図 1



例2



例3

障害者の自立生活を 支援する介助犬の導入に対して

—外出頻度の高い障害者の介助への意識調査—

大林博美

愛知新城大谷短期大学 介護福祉専攻

樋口恵子

全国生活自立センター代表

高柳友子

東京医科歯科大学動物

宮尾 克

名古屋大学大学院 多元数理科学研究科

【要約】

本調査によって、活動度の高い障害者の自立生活に、介助犬の可能な介助で現在の生活にあっという間と思われる介助は、緊急時連絡機能に64.7%、手指代償機能に71.5%、環境代償機能に59.0%と介助犬の可能な介助項目が、障害者の自立生活に大きく役立ち期待されていることが明らかになった。一方、主な興味や不安は、介助犬の世話や維持費用や住宅事情に関することであった。

【研究目的】

活動度の高い障害者の、介助犬への興味や、期待、不安について明らかにすることを本調査研究の目的とする。

【研究方法】

(1) 調査期間 平成11年11月1日～平成11年11月24日まで

(2) 調査対象

昨年度の「障害者の介助犬への意識調査」から、一人暮らしの方や経済的に家族から自立している方のほうが、介助犬を自分の生活に積極的に取り入れたいと考えていることが伺えた。そこで、今回の調査対象を、自立した生活を顕著に意識し活動している全国自立生活センターの会員を調査対象にしたいと考えた。

全国自立生活センター協議会名簿（1998年度発行）の72団体より、53団体（各都道府県1から3団体とした）を抽出し、5名分の質問票を53団体に送り、回答の得られた団体25団体（47.1%）の102名（38.5%）を調査対象とした。

(3) 調査方法

1. 郵送法：質問票を各団体に郵送し期日までに各団体から返送して頂く。
2. 全国自立生活センターのホームページに掲載し、連絡を受けた場合に郵送法にて調査を行う。

(4) 調査内容

10年度の調査研究から、「介助犬に対する不安や期待」は、介護を要する対象者側の身体障害や疾病に加えて、精神的、情緒的問題や家庭的、地域的な援助問題さらに、経済的、就労問題などと多面的な社会問題、生活問題と深い関係があることが伺えた。

したがって、今回の調査内容を以下のこととした。

- (1)対象者の概要を知るために、年齢・性別・疾患名・職業・同居人数・介助者
- (1)介助犬への周知度を知るために、介助犬の周知状況と情報入手方法
- (1)介助犬への興味を知るために、介助犬の興味の有無・興味内容・希望の有無、
- (1)介助犬への不安を知るために、具体的な不安内容
- (1)緊急事態への対応を知るために、一人の移動中のハプニング、移動動作中、起きあがれなかった経験、突然大きなものが落ちてきて下敷きになった経験、突然の訪問客に対応できなかった経験、夜道で人に襲われそうになった経験、一人暮らしで不審な人に襲われそうになった経験、日常生活動作や状況を知るために、ADLレベル、外出回数、目的、外出で困ったこと、
- (1)介助犬の可能な介助に対しての期待を知るために、介助犬の可能な介助を a. 緊急時連絡手段確保 b. 手指代償機能 c. 環境代償機能に分類し具体的な期待項目を調査した。

【結果】

1. 対象者の概要

回答総数は、102名で回答があったのは、郵送法のみであった。

年齢は、年代別に分けると、10代3名(2.9%)、20代19名(18.6%)、30代33名(32.4%)、40代35名(34.3%)、50代8名(7.8%)、60代2名(2%)であった。

性別は、「男性」が52名(50.9%)、「女性」が41名(40.1%)、「無回答」が9名(0.8%)であった。疾患は、「脳性麻痺」が54名(53%)、「小児麻痺」が11名(10.7%)、「脊髄損傷」が12名(11.7%)、「筋ジストロフィー」が7名(0.6%)、「脳卒中」が2名(0.1%)、「その他」が13名(12.7%)、「無回答」が2名(0.1%)であった。

職業は、「ある」が50名(49.0%)、「なし」が38名(37.2%)、「無回答」が14名(13%)であった。同居人数は、「1人」が43名(42.2%)、「2人」が20名(19%)、「3人」が16名(15%)、「4人」が13名(12%)、「5人以上」が8名(7%)、「施設入所者」2名(2.0%)であった。

介助者(複数回答)は、「有料介助者」が45名(44.1%)、「ヘルパー」が35名(34.3%)、「親」が25名(24.5%)、「ボランティア」が16名(15.7%)、「配偶者」が11名(10.8%)、「兄弟」が9名(0.9%)、「その他」が9名(0.9%)であった。このうち、一人暮らしをしている43名は、すべて「有料ヘルパー」を利用していた。

介助犬への周知度

介助犬の存在を「知っている」と答えたのは、97名(95.0%)で、「知らない」は3名(0.2%)、「無回答」は2名(0.1%)であった。

情報方法(複数回答)は、「TV」が76名(74.5%)、「新聞」が34名(33.3%)、「障害者の交流」が27名(26.4%)、「福祉関係雑誌」が19名(18.6%)、

「医療・福祉関係者」が3名（0.3%）であった。

介助犬への興味の有無

「興味がある」と答えたのは、72名（70.5%）であり、「興味がない」は23名（22.5%）、「無回答」は23名（22%）であった。

「興味がない」という理由は、「犬が嫌い」、「アレルギーがある」、「あくまでも犬は動物で介護者の代償ではない」等であった。

「興味があると答えた」者で、「介助犬を欲しい」と答えたのは、26名（25.4%）、「欲しくはないが興味がある」は、41名（40.1%）、「その他」は、5名（0.5%）で将来欲しいというものであった。

興味内容（複数回答）については、「維持費用」34名（33.3%）、「入手方法」31名（30.3%）、「その他」8名（0.7%）で、「言語障害が理解できるか、どのような世話が必要か、犬のことをよく知りたい、」などであった。

4. 介助犬への不安内容

介助犬を利用する上での不安内容（複数回答）は、「犬の世話」が41名（40.1%）、「住宅事情」が37名（36.2%）、「犬の世話の協力者」が23名（22.6%）、「犬になれるか」が14名（13.7%）、「犬の飼育獣医費用」が5名（0.5%）、「その他」が8名（0.8%）となっている。その他の内容は、「アレルギー体質なので不安、犬の健康管理方法、必要性があればほえるか、他の犬と仲良くなれるか、介助犬を利用することによる維持費用」などであった。

このように、主な不安は、「犬の世話」や「世話の協力」に関することであった。

1. 緊急の出来事

①「一人での移動中のハプニング」は42名（41.1%）であった。その原因は、電動車椅子のバッテリー切れやパンクなどが多く、その他に段差や障害物を乗り越えようとして転倒する場合や踏み切り内で車椅子のタイヤがはまったなどのケースなどもあった。

このような時、自力で起き上がった、通行人などの居合わせた人からの援助を受けた。電話で知人や家族を呼んで対応したと一文で回答されているが、中には人に援助を求め依頼をするときに、言語障害があることから、なかなかうまく伝わらなくて困ったというケースや、人通りが少ないところで何時間も人のくるのを待っていたケースや、たとえ自分で起き上がっても数時間かかって起き上がったケースなど相当の時間を要している場合があった。

②「移乗動作でのハプニング」は、38名（37.2%）であった。多くは、車椅子から車への移乗時が多かった。このときは、自力で起き上がった、通行人などの居合わせた人からの援助、電話で知人や家族を呼ぶなどであった。①「一人での移動中のハプニング」と同様に、援助を受けるまで数時間要したケースもあった。

③「突然の訪問者」は、12名（11.7%）であった。対応せずに無視して黙っている場合がほとんどであった。しかし、中には対応が出来ないので常時鍵をかけないようにしているものもいた。

④「不審な人の侵入」は、7名（0・6％）であった。

「突然の不審者に大声をだし、警察に連絡をした」、「顔見知りの新聞屋にいきなり乱暴されそうになり、大声を出したら逃げた」、「何度も泥棒に入られている。他に適当な住居が見つからないので住み続けている。」等であった。

⑤「夜道でのハプニング」は、6名（0・5％）であった。

「通行人にいきなり暴力を受けた」、「財布を取られそうになった」ケースなどであった。「電動車椅子でひたすら逃げた。」「大声を出し、交番に駆け込んだ」等であった。

⑥「その他」は、13名（12・7％）であった。

東北地方の頸椎損傷者で一人暮らしでのケースで「食事がなく栄養失調になって入院」、小児麻痺で一人暮らしでのケース「ガラスが割れて掃除できない」、「駐車場でチケットを落としてしまったケース」、「床に落ちたものを拾おうと車椅子から落ち怪我をした」ケースなど、さまざまであった。

6. 日常生活活動度

外出回数は、「殆ど毎日」72名（70・5％）、「週数回」17名（16・7％）、月数回5名（0・4％）、年数回1名（9％）、無回答8名（7％）であった。

外出の目的（複数回答）は、「通院」102名（100％）、「買い物」77名（75・5％）、「障害者団体の活動」69名（67・6％）、「通勤」56名（54・9％）、「旅行」49名（48％）、「知人宅訪問」44名（43・1％）、「地域施設利用」39名（38・2％）であった。

外出で困ること（移動の壁）は、「階段が多い」60名（58・8％）「建物の整備が不備」42名（41・2％）、「交通機関」26名（25・5％）、「車などの危険」25名（24・5％）、「介助者がいない」19名（18・6％）、「人との会話」5名（4・9％）、「人の目」3名（2・9％）であった。その他は8名（7・8％）で、「急な外出が決まった時介助者いない時」、「親兄弟以外に介助者がいない」、「自分の希望する時間に介助者ボランティアがみつきにくい。」、「介助者との時間合わせが難しい」等、介助者の問題点を挙げている。

このように、建築物や公共交通機関が主な移動の壁となっている。次に「介助者」の問題が多いが、介助者の問題も、障害者の行動範囲を狭めるものだけでなく、精神的に自立した生活を営みにくくするものと懸念するところである。

7. 生活する上で助かると考えられる介助（介助犬の可能な介助）

「現在の生活で、介助してくれる人や介助犬がいたら、生活する上で助かると考えられる介助」については、①緊急時連絡手段確保である、「人を呼んでくる」が66名（64・7％）、「電話の受話器を持ってくる」が、50名（49・0％）「非常ボタンを押す」が、45名（44・1％）であった。②手指代償機能である、「手の届かないものを取る」が73名（71・5％）、「落としたものを拾う」が66名（64・7％）、「チケットやカードなどの機械から受け取る」が61名（59・8％）、「ドアの開閉」が58名（56・8％）、「エレベーターや電気のスイッチボタンを押す」が57名（55・9％）、「衣服着脱

行為」が49名(48.0%)であった。

③環境代償機能である、「段差や凸凹を越える介助」が61名(59%)、「転倒時の起きあがり」が51名(50%)、「寝返りをする」30名(29%)であった。

先述した、「介助犬に興味がない23名のうち21名が、生活する上で助かる介助項目に回答をしていた。このことは、質問に答えることによって何らかの介助犬について学習がなされ、介助犬について理解がなされた者もいた。このことから、興味を持たない理由の中には、テレビや新聞などからの限られた情報によって介助犬を理解している者がいる。もう少し、具体的に現実的な方法で介助犬について周知させていくことが必要であろう。

8. 介助犬に対しての期待や意見

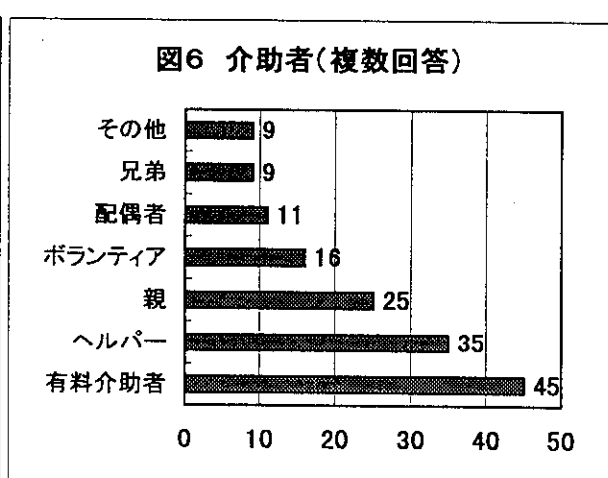
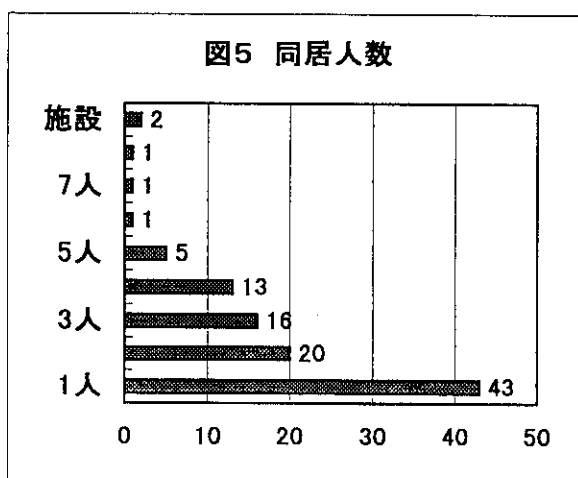
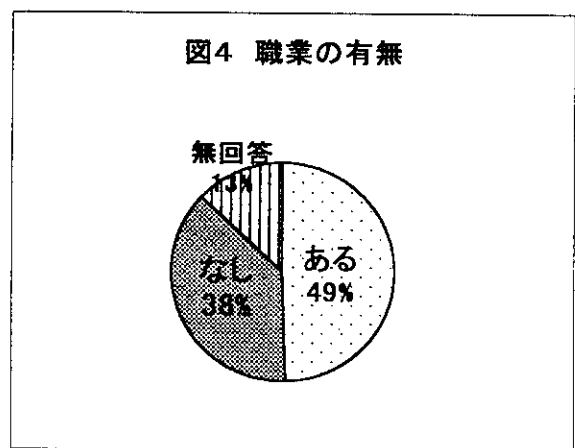
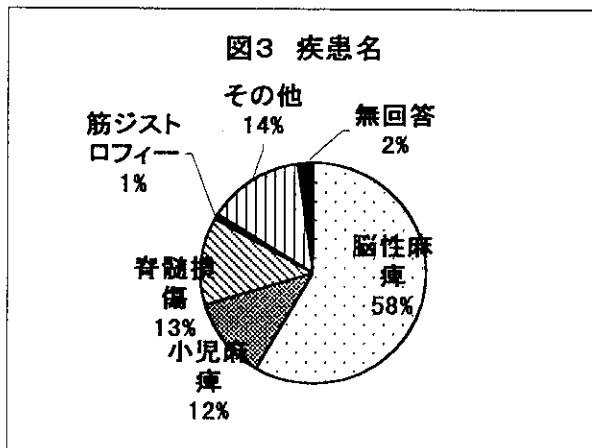
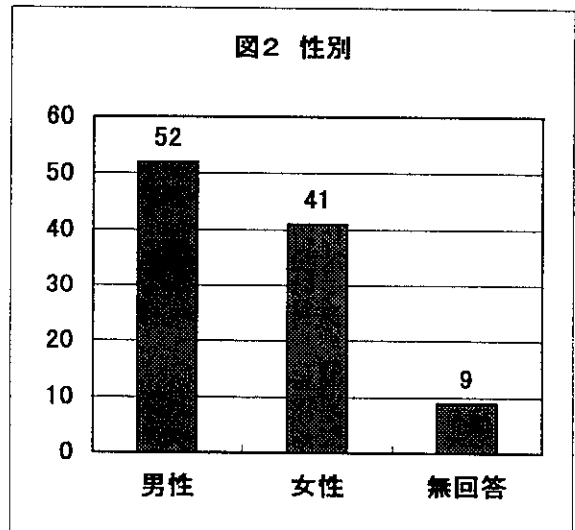
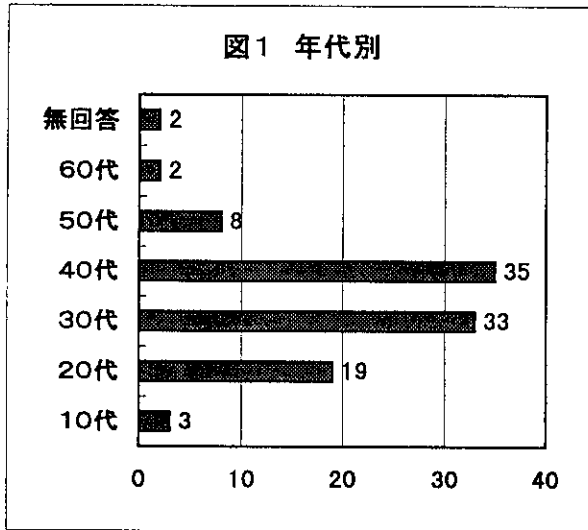
介助犬に対しての期待や意見は、「①言語障害があっても可能か②とにかく頭数を増やして欲しい③小さないろんな団体があるので紛らわしい④盲導犬としても利用できるか④どこで訓練しているか情報が欲しい⑤犬は人間にとって友達であり、ペットでよいと思う。⑥世話のできない時どうしたらいいか⑦体験談が聞きたい⑧必要性を痛感現実導入可能な法整備を急いでほしい」などであった。

【結論】

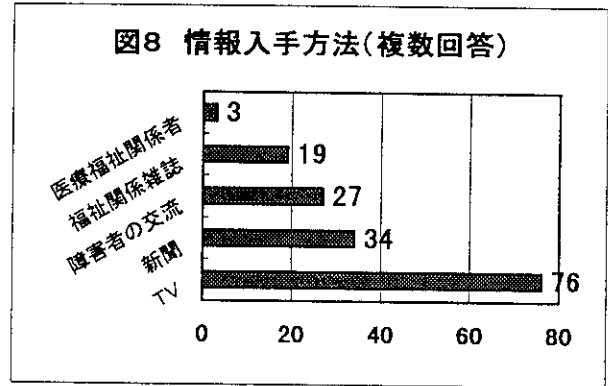
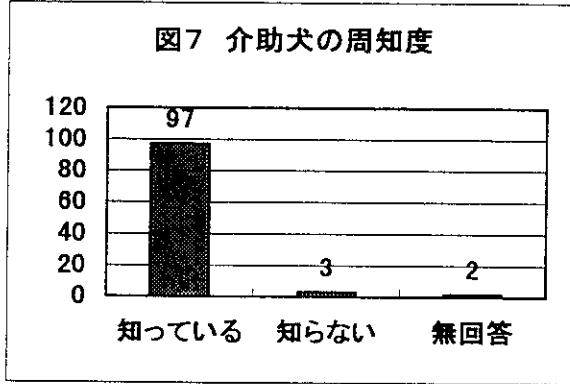
活動度の高い肢体不自由者の生活は、移動中'や夜道でのハブ'ニグ'や不審者の侵入等、大変不便な生活と危険にさらされている。このような障害者の生活に、よく訓練された介助犬が存在するならば、現在より少しでも自立し安心した生活を送ることができるように成ると考える。

既に、盲導犬は、視覚障害者の目を代償し自立生活を支援する一つ的手段として活用され、社会的にも認知され各省庁からの通達や保護制度のうえで普及されている。介助犬も、その有用性が認められ盲導犬と同様に制度上の施策の整備が望まれるところである。制度上の施策の整備により①介助犬の世話②介助犬に対する費用負担③交通機関や飲食店などの規制緩和や障害者と同動範囲の行動の保証④介助犬と生活できるような住宅環境や条件⑤介助犬育成・管理の統一化などの課題が社会的な理解とともに解決されていくのではないかと考える。

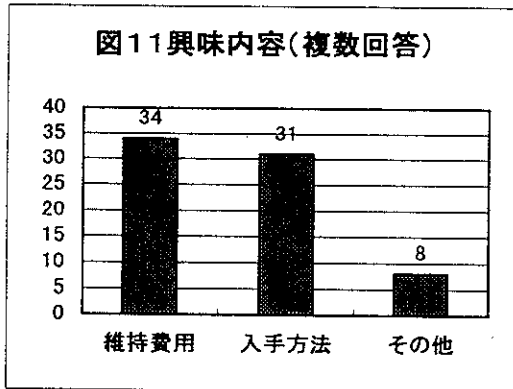
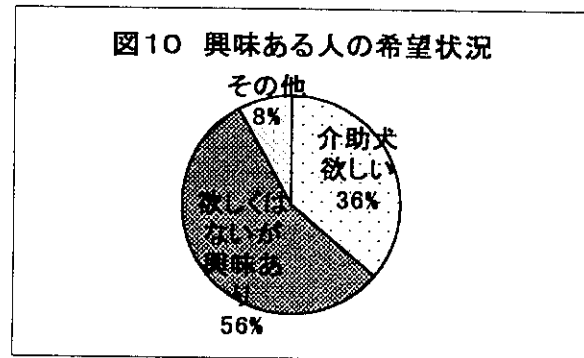
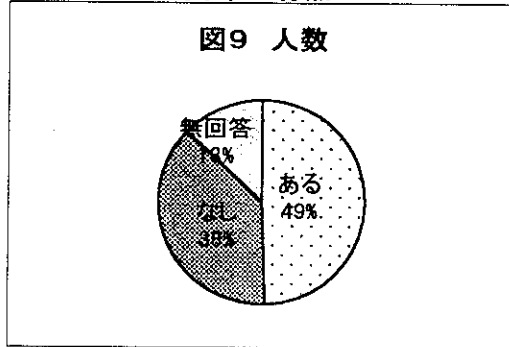
1. 対象者の概要



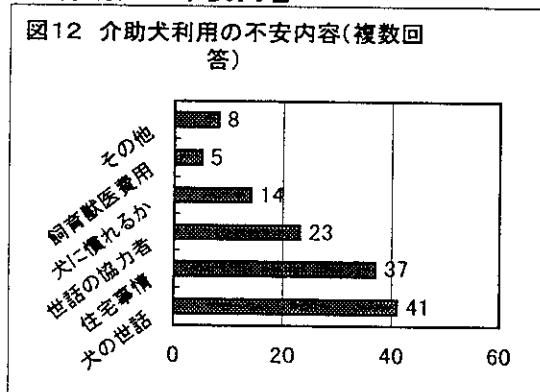
2. 介助犬への周知度



3. 介助犬への興味の有無

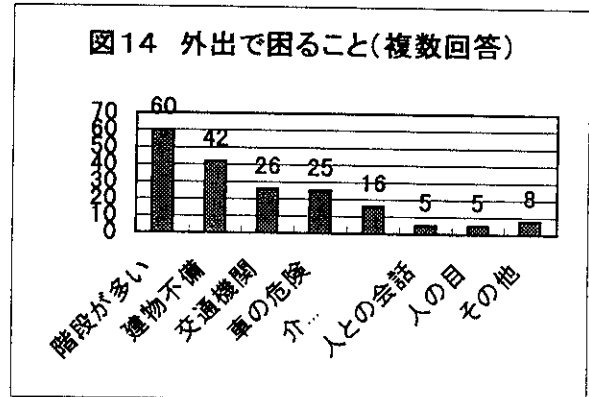
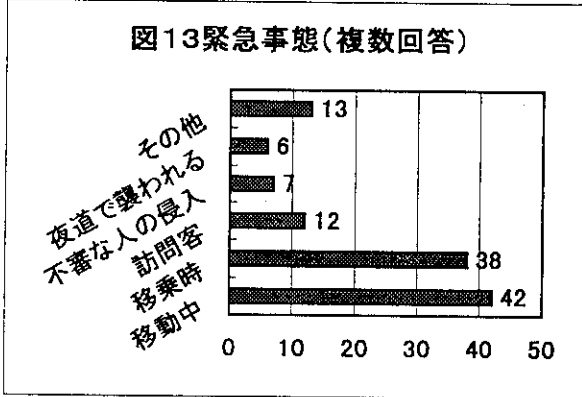


4. 介助犬の不安内容



5. 日常生活状況

(1) 緊急事態及び外出困ること



(2) 活動度

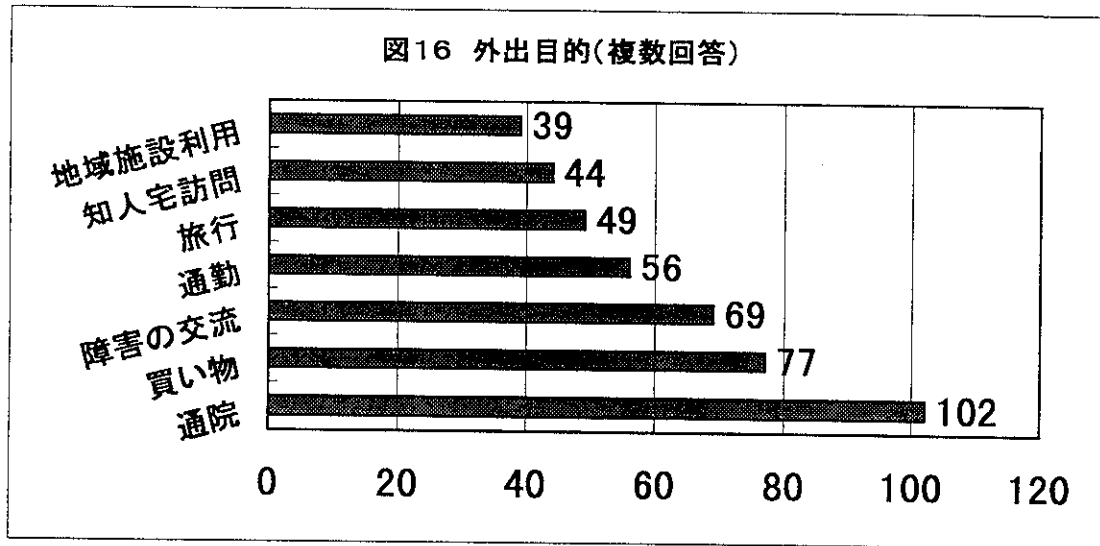
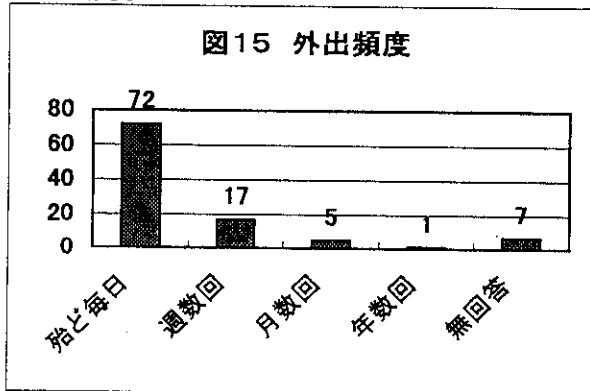
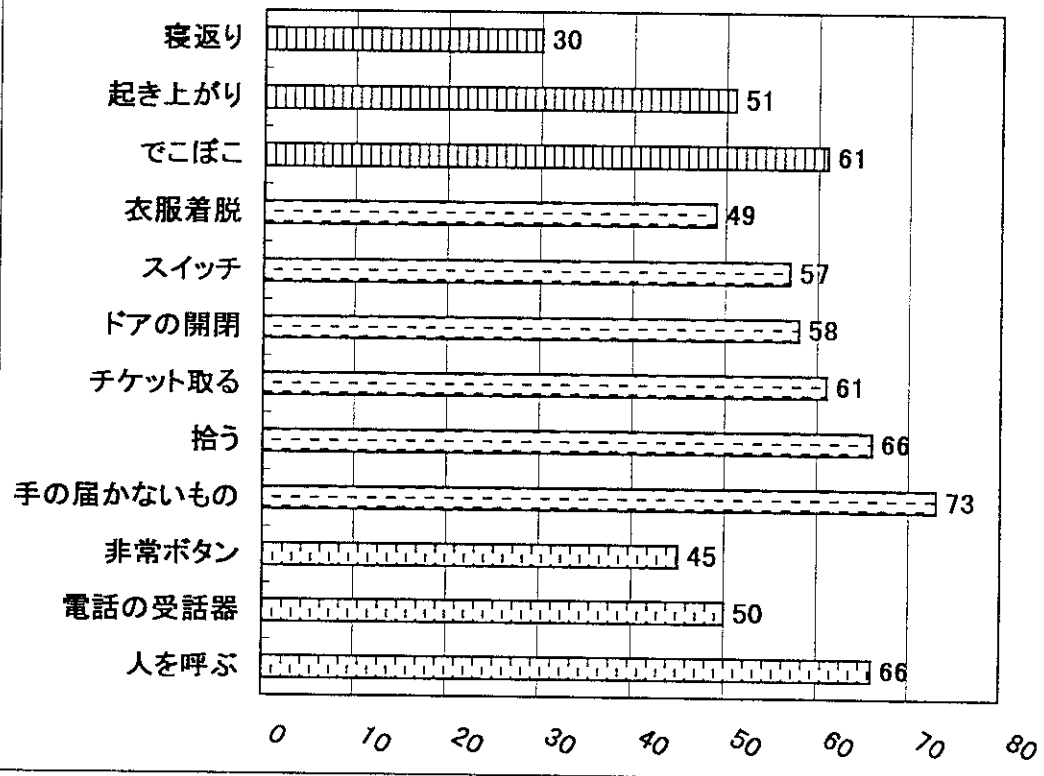


図17 介助犬の介助可能な動作への期待(複数回答)



海外介助犬使用者実態調査

分担研究者 高柳友子

東京医科歯科大学医動物学教室大学院生

共同研究者 樋口恵子

全国自立センター協議会代表

研究要旨

海外で実働する介助犬使用者に対してアンケート調査を行ったところ、32名の介助犬使用者から回答があった。障害種は肢体不自由で、介助犬の希望動機は自立が最も多く、犬による友情や愛情、自立動作改善及び介護者の負担軽減となっていた。介助内容は個々に違ったが、介助項目としては手指代償機能が最も多く、歩行及び姿勢保持、緊急時連絡手段確保、移乗及び移動介助等に分類できることがわかった。介助犬の効果としては自立度及び自立動作増加の他に外出頻度の増加、精神的効果を上げている使用者が多かった。しかしながら、待機期間は平均 7.5カ月で2年間待機していた例もあり、訓練期間にも2週間から2年間と大きな格差が認められた。72%が何らかの費用を負担しており負担額は\$50から\$1万で平均\$1445であった。ADA法により使用者の社会参加が保障されているにも関わらず、大多数の使用者が社会参加に支障を来す経験を持っていることがわかった。

1. 調査目的

海外で実働する介助犬使用者本人に対して使用者の障害、介助犬希望動機、介助内容、介助犬による効果、社会参加状況等に関する調査を行い、わが国における介助犬の適応の可能性と育成及び社会での受け入れに関する課題を検討する。

2. 調査方法

期間：1999年10月より1999年12月

対象：欧米諸国（主に米国）の自立生活センター 33か所及び米国の介助犬育成団体29か所（デルタ協会内ナショナルサービスドッグセンターの介助犬育成団体リスト）のうち電子メールを送付可能な団体代表者から紹介された介助犬使用者

方法：介助犬育成団体と自立生活センター代表者を通じて介助犬使用者に質問書を電子メールで送付し、同じく電子メール（一部郵送）で回答を収集した。質問書には調査目的として日本における介助犬への発展に寄与するための情報収集であることを記載し、任意の回答とした。質問には記名、住所等の質問はなく、内容の不明点がある回答者で任意の希望に対して連絡先を明記してきた回答者に対してのみ必要に応じて電子メール等で再度

質問をして回答を収集した。

質問項目：年齢、性別、職業、家屋環境、介助犬の介助内容、介助犬への満足度、希望動機、情報源、訓練者及び訓練期間、訓練への満足度、負担費用とその内容、社会参加及び雇用時の問題の有無とその内容、一人での外出の有無と介助者、診断及び障害種別、使用自助具、本人によるADL評価（Barthel Index）と介助犬の効果等21項目で、介助内容、自助具、介助犬の効果については合致する項目全ての複数回答とした。

3. 調査結果

介助犬使用者32名より回答を得た。質問書送付時のトラブルで17名より前半部分の回答しか得られなかった。また、8名が年齢、性別、職業を犬について回答していたため、集計から省いた。回答のあった24名中男性8名、女性16名で平均年齢は40.7歳（6 - 52歳）。職業は24名中17名（71%）が学生または仕事をしており、家屋環境は持ち家が71%と最も多かった。介助内容は物を取って渡す・運ぶ - 84%、荷物を運ぶ及びドアの開閉 - 81%、歩行や姿勢支持及び電話機や人を呼ぶことでの緊急時連絡手段確保 - 47%、車椅子を引く - 44%、着脱衣介助 - 38%、起立・体位変換等の体位移動介助 - 34%、移乗介助 - 22%等で、その他として電気スイッチ、洗濯物の出し入れ、就寝時の毛布のかけ直し等の回答があった。介助犬には全員が満足していた。希望動機は自立が最も多く100%、犬との友情や愛情 - 88%、自立動作改善 - 81%、外出の機会増加 - 66%、家族や友人等からの心配の軽減 - 63%等の順であった。情報源は他の使用者から - 41%が多く、メディア - 28%、知人からの薦め - 19%の順となっていた。訓練者は育成組織所属訓練士が最も多く72%、障害者自身も16%あった。申込みから訓練開始までの待機期間はなし（持ち犬）から2年間で平均7.5カ月、訓練期間は2週間から2年間で平均14.8カ月であった。負担費用はありが72%、なしが28%、負担額は\$50から\$1万で平均\$1445であった。用途は道具代が最も多く、訓練費用、申込み費用、育成組織への寄付等であった。社会参加の障壁は経験有りが87%、なしが13%、内容としては店舗、飲食店、ホテル、交通機関、の順に多く、その他病院等が挙げられた。障害及び診断に関する回答は15名のみからしか得られなかった。筋力低下、片麻痺、四肢麻痺、下肢麻痺の順に多く、診断は15名中小児麻痺 - 2名、てんかん - 2名、脳性麻痺が1名、関節疾患（診断不明）1名、関節拘縮症1名、先天性骨端線形成不全症1名、頸髄損傷（C5 - 6）が1名、Arnold Chiari 症候群（C3 - 4）による四肢麻痺が1名、多発性硬化症1名、脳障害（診断不明）による下肢及び左上肢筋力低下1名。使用自助具は車椅子（電動を含む） - 87%、杖 - 40%、リーチャー - 40%、補装具 - 27%、人工呼吸器 - 20%、義手・義足 - 13%であった。Barthel Index で介助犬によって改善があったのは移乗についてが4名、階段昇降4名、着替え3名、歩行（車椅子）2名、入浴1名との回答が得られた。介助犬による効果では自立度上昇 - 100%、機能的改善 - 87%、外出頻度の増加 - 87%、犬に対する友情 - 87%などであった。

4. 考察

先天性及び慢性神経・筋疾患による肢体不自由者が自立、機能改善、社会性の改善及び精神的安定を目的として介助犬を希望しており、情報源は他の使用者やメディアが主であった。介助内容は個々の使用者により異なっていたが、指示された物をくわえて指示された場所で放す - 即ち手指代償機能として、物を拾う、手の届かない物を持って来る、ドアの開閉、体位変換、着脱衣介助、電話機を持ってこることでの緊急時連絡手段確保の主な介助内容が訓練されており、その応用として洗濯物の出し入れや毛布のかけ直し等が行われていた。次に犬が台代わりとなって移乗及び姿勢保持の介助、台車の機能として物を運搬する、が主な介助項目となっており、全ての介助犬が複数の介助項目を持っていた。その他、エレベーターや電気のスイッチを押す、てんかん発作の予知及び発作後の介助、人を呼ぶがあった。これらの回答から主な介助項目としては手指代償機能と姿勢保持及び荷物の運搬、緊急時連絡手段確保にまとめられると考えられる。犬の動作としてはてんかん発作の予知を除いて1)指示された物をくわえて指示された場所で放す又は足や鼻で指示された物を押す 2)物を運搬または牽引できる 3)指示された時間姿勢を保持し、動かずにいる 4)人を呼んでくる の4項目に分類できると考えられる。

米国においても介助犬の育成方法は統一されておらず、待機期間は半年以上であり経済的負担も大きいことが明らかとなった。また、法整備がなされていても大多数の使用者が介助犬により社会参加に支障を来した経験を持っており、社会的認知には未だ課題があることが明らかとなった。介助犬の効果としては Barthel Index ではあまり顕著な ADL 改善は認められなかったが、回答者全員が自立度が上昇したと回答しており、機能的改善及び外出頻度の増加、精神的、社会的効果を上げていた使用者が多かったことから、介助犬の効果に関する評価は従来の ADL 評価ではない手法を用いる必要性が示唆された。

5. 結論

介助犬の動作として指示に従いくわえて放す、姿勢保持等の基本動作が必要であることがわかった。適応疾患としては脳・神経疾患、筋疾患、骨関節疾患及びてんかん等が考えられるが、各疾患による障害者に適応する介助犬の介助内容はリハビリテーション医学的評価により分類が可能と考えられる。

使用者自身が介助犬の機能的、精神的、社会的効果を重要と考えており、介助内容も分類できることから、介助犬は車椅子等の自助具と同様の処方・補助体制を以て障害者が多大な経済的負担をせず入手できるような社会整備が必要と考えられる。また、同時に使用者が介助犬によって社会参加が妨げられることのないような社会体制作りが必要である。

海外介助犬使用者実態調査調査結果

- 1) 性別
 男性 8名 (33.3%) 女性 16名 (66.7%) N=24
- 2) 年齢 6-52歳 (mean 40.7)
- 3) 職業
 あり 17名 (70.8%) なし 7名 (29.2%)
- 4) 介助項目 (複数回答) (名 (%)) N=32
- | | | |
|---------------------|----|------|
| ものを取る・拾う及び運ぶ | 27 | 84.4 |
| 荷物の運搬 | 26 | 81.3 |
| ドアの開閉 | 26 | 81.3 |
| 歩行介助 | 15 | 46.9 |
| 緊急時連絡 (人を呼ぶ、電話機を持って | 15 | 46.9 |
| 車椅子の牽引 | 14 | 43.8 |
| 着脱衣介助 | 12 | 37.5 |
| 体位変換介助 | 11 | 34.4 |
| 移乗介助 | 7 | 21.9 |
| 音を知らせる | 5 | 15.6 |
| てんかん発作予知及びその後の補助 | 4 | 12.5 |
| 誘導 | 1 | |
| その他 | 12 | 37.5 |
- 5) 介助犬に満足していますか
 はい 32名 (100%) いいえ 0 (0%)
- 6) 介助犬希望動機 (複数回答) (名 (%)) N=32
- | | | |
|--------------------|----|------|
| 自立度改善 | 32 | 100 |
| 犬に対する友情や愛情 | 28 | 87.5 |
| 自立動作の増加 (機能的自立度改善) | 26 | 81.3 |
| 外出頻度の増加 | 21 | 65.6 |
| 家族や介護者の精神的負担軽減 | 20 | 62.5 |
| 精神的支持 | 18 | 56.3 |
| 安全管理 | 18 | 56.3 |
| 自尊心の回復 | 17 | 53.1 |
| 身の危険の回避 | 15 | 46.9 |
| 犬を介しての他者との交流 | 15 | 46.9 |
| 社会的地位の改善 | 13 | 40.6 |
| その他 | 8 | 25.0 |
- 7) 介助犬の情報源 (名 (%)) N=32
- | | | |
|--------------|----|------|
| 他の使用者 | 13 | 40.6 |
| メディア | 9 | 28.1 |
| 他の人から勧められた | 6 | 18.8 |
| 医療従事者からの勧め | 3 | 9.4 |
| インターネット | 3 | 9.4 |
| 介助犬育成組織からの勧め | 2 | 6.3 |
| 介助犬情報啓発機関 | 2 | 6.3 |
| その他 | 3 | 9.4 |
- 8) 誰が介助犬の訓練をしましたか (名 (%)) N=32
- | | | |
|--------------|----|------|
| 介助犬育成機関所属訓練士 | 23 | 71.9 |
| 使用者自身 | 5 | 15.6 |
| 個人訓練士 | 3 | 9.4 |
| その他 | 1 | 3.1 |
- 9) 介助犬の訓練に満足していますか
 満足 31名 (96.9%) 不満 1名 (3.1%)
- 10) 訓練士には満足していますか
 満足 31名 (96.9%) 不満 1名 (3.1%)